

# 森鷗外「藤棚」論

秀麿の葛藤

瀧本和成

はじめに

「藤棚」は、明治四五（一九一二）年五月一日に書き上げられ、明治四五（一九一二）年六月一日発行の雑誌「太陽」第一八巻第九号に発表されている。その後大正三（一九一四）年四月五日粗山書店より刊行された単行本『かのやうに』に収録されている。大正七（一九一八）年一二月森鷗外から出された山田珠樹宛書簡によれば、「藤棚ハ小生ガ妻ト当時ヲサナカリシ茉莉トヲ連レテ岩崎別荘ニ参リシ記事ニ候只妻孥ハ表面ニ不出候貴人ハ閑院宮様ニ候」とあり、「主人公ハ全ク実在セザルモノニ候シカルニ奇ナルハ同名ノ人青年ニテ当時家庭内ノ葛藤ノタメ座敷牢ニ入り居リ其人ニ父トノ衝突モアリシ由ニテ小生ニ書ヲ寄セ来候」と述べられている。この「藤棚」は、鷗外が妻志げ、娘茉莉と共に出かけた「高輪岩崎邸のPianoforte会」を素材にして、「全ク実在セザル」主人公五条秀麿をどのように描いた作品なのか。

作品の冒頭は五条秀麿がI男爵邸で開かれる音楽会に出掛けるまでの様子が描かれる。

「けふは音楽会へ往つて参ります。風がなくて、好い天気ですから。」五条秀麿は午食の時に母にかう云つた。めつたに外に出ないので、なぜ出ると云ふ理由を言はなくては済まないやうな気がしたのである。一週間程前に画をかく友達の綾小路に案内せられて、築地へ往つたのは何十日目で出たのか覚えてもゐない位であつた。

秀麿は、普段ほとんど外出しないため、珍しく出掛けるときはその理由を言わなくてはならないやうな心持になっている。自ら進んでの外出は、秀麿自身「異様に感ぜられるから、周囲の人が訝るだらうと思つたのである」。この時の秀麿の思いは「人の期待してゐることを行はないのが常になつて見れば、速にそれを行

ふのが、妙に操を失ふやうに感ぜられてならないのである。はたして「小間使の雪が家従部屋に伝へたので、暫く家職の人達の間に何か言ひ合つてゐる声がしてゐた。めつたに出ない若殿が徒歩で出ると云ふのが、腑に落ちなかつた」らしい。けれども、母からは「秀麿の懸念した訝る表情は少しも顔に現はれなかつた」。それどころか母は「どうぞ秀麿が少し外へ出るやうになれば好いと折つてゐる」。秀麿の外出に対して、母の「目は、果して嬉しそうに赫き、父の「子爵は笑つた」。「秀麿の顔には微笑が浮んだ」。秀麿の神経過敏になつてゐる様子とその秀麿を家族や周囲の者が氣遣う様子が描かれる。一見和やかそうに見える上流階層の家庭に潜んでゐる親と子の微妙な心理の揺れが描出されてゐる。表面的には幸福そうに見える五条家にも実は親子の問題がすでに見え隠れしてゐる。父も母も秀麿も本音を語らず曖昧にする術を心得てしまつた。この親子の問題は、五条秀麿連作物第一作目となつた「かのやうに」(中央公論 第二十七年第一号 明治四五・一)中ですでに描かれてゐる。

そこで秀麿は父と自分との間に、狭くて深い谷があるやうに感ずる。(中略)秀麿と父との對話が、ヨオロツバから帰つて、もう一年にもなるのに、兎角対陣してゐる両軍が、双方から斥候を出して、その斥候が敵の影を認める度に、遠方から射撃して還るやうに、はか／＼しい衝突もせぬ代わりに、平和に打ち明けることもなくてゐるのは、かう云ふわけである。

「かのやうに」では、親子の関係は「衝突もせぬ代わりに、平和に打ち明けることもない状態」で終始するが、「藤棚」での父と子はそれに比べ半歩踏み込んで描かれてゐる。とくに昼食での父母と息子との会話は、そうした五条家の家族関係を浮き彫りにしてゐる。この食事の場面は主として三つのお話取り上げられ、秀麿の心境や考えが述べられる。

1 西洋音楽は面白みが解らない、という父に、秀麿は次のやうに言う。

若し世間の人々が皆お父様のやうに、飾らずに感じた儘を言つてしまふのだと、聞きに往く人がもつと少くなりませう。實際雷同して面白がつてゐる人が多いのですから。

2 メチユウルアルコホルを飲んで、車夫が盲目になつた話について秀麿は考える。

毒に対する恐怖と云ふことを心の中に考へた。薬は勿論の事、人生に必要な嗜好品に毒になることのある物は幾らもある。世間の恐怖はどうかするとその毒になることのある物を、根本から無くしてしまはうとして、必要な物までを遠ざけようとするやうになる。

3 続いて近ごろ出る、道徳を看板に懸けた新聞や小冊子の話になる。

書く人は誠実に世の為、人の為と思つて書いても、大抵自分々々の狭い見解から、無遠慮に他を排して、どうかすると信教の自由などと云ふものの無かつた時代に後戻をしたやう

に、自分の迷信までを人に強ひようとする。それを聴かないものに、片端から乱心賊子の極印を打つ。これも矢張毒に対する恐怖に支配せられてゐるのである。(中略)毒に対する恐怖が却つて毒を醸し出すことになる。

父の口からはそれに多少同情のある詞もだが、

秀麿はそれを聞いて、今更のやうに父と自分との間に、時代の懸隔のあることを想はせられて、直ちずにある創の痛が微細な刺戟に促されて起るやうに、悲しいやうな、心細いやうな感じに襲はれた。(中略)秀麿はかう考へながら、それを父に打ち明けることが出来ない。打ち明けて、父がどこまで飲み込んでくれるかが覚束なくて、いつものやうに口を噤んでしまふのである。

母との会話にもちぐはぐさが露呈している。

「晩のご飯は帰つてお上がりでせうね」と夫人が云つた。少し外へ出るやうだと好いと思つてゐた秀麿に、今出て行かれるとなると、もう早く帰つて貰ひたいと思ふらしい様子である。

「ええ。きつと帰ります。」誓ふやうに秀麿は答へた。

付和雷同して洋学崇拜する者、風俗や秩序を壊乱すると称して思想そのものを危険視し弾圧を加える権力者、封建道徳を持ち出してそれを基準に明治社会を規定し、個人や言論の自由を排斥する出版界に対する秀麿の批判が描かれる。しかし、父には「どこまで飲み込んでくれるかが覚束なくて、いつものやうに口を噤ん

でしまふ」。自らの心の中を打ち明けようとしないう秀麿に「悲しいやうな、心細いやうな」表情が滲み出る。秀麿の深い内向性に腫物に触るよう氣遣う父親だが、その真意は理解されない。息子の(ami)は、母親の優柔不断な態度にも反映されている。両親との間に横たわる「時代の懸隔」を痛感する秀麿に父母との会話は存在しても真の対話は閉ざされたままである。

## 二

秀麿は人力車ではなく、今日は徒歩で出掛けた。

ベルリンで買った、太い藤のステツキを握つて、邸の門を出た。(中略)黒板塀の裾の隙間に可哀らしい蒲公英の花の咲いてゐる所もある。その花の一つに小さい白の蝶の止まつてゐるのを見附けて、殆ど無意識に手を伸ばして摘んだ。

(中略)秀麿は白い乳汁の指に滴る蒲公英の茎を手を持つて暫く歩いてゐたが、片手にはステツキを持つてゐるので、段々邪魔になつて来た。(中略)秀麿はそつと手に持つた花を、その蒲公英のある所に落して置いて、重荷を卸したやうな気がしたが、忽ち又自分で自分を恥ぢるやうな氣になつた。そして若しこんな事をしたのを、画をかく友達の綾小路が見たら、サンチマンタルだと云ふだらうと思つた。

「画をかく友達の一綾小路は、先の山田珠樹宛書簡の中で「カノヤウニハ中ニモデルエルヲ使ヒアルハ画工一人ニテコレハ旧友

## 三

音楽会への道筋秀麿は、「外堀線」の電車に乗った。

めつたに外に出ない秀麿は、事新しくベルリンの電車と違ふ所を考へた。あつちでは座席が一ぱいになれば満員である。吊革は運転中に電車の中を歩く時掴まるために吊つてあるのだから、それを持つて立ち留まると車掌が小言を言ふ。同じ交通機関が出来ても、こつちのはなんとなく物足りない心持がする。洋行帰の人の中に、此心持を誇張して、故郷を詛ふのなんのと云ふもの出て来るのは、面白くない現象ではあるが、何に付けてもこの物足らなきの離れないのを、全然抹殺することは出来ないと思つたのである。

岩村透二候」とある。綾小路は「かのやうに」中「学習院を秀麿と同期で通過した男である。秀麿は大学へ行くのに、綾小路は画かきになると云つて、溜池の洋画研究所へ通ひ始めた。それから秀麿がまだ文科にゐるうちに、綾小路は先へ洋行して、パリイにゐた。(中略)それで故郷へ帰つて以来引き籠り勝にしてゐる秀麿の方からは、尋ねても行かぬのに、折々遊びに来て、秀麿の読んでゐる本の話、口ではちやかしながら、真面目に聞いて考へても見るのである」と紹介されている。綾小路は秀麿に向つて「気持の好い天気だぜ。(中略)こんな日に鼠のやうになつて、内に引つ込んで、本を読んでゐるのは、世界は広いが、先づ君位なものだらう」と言う。内に内にと向かいがちな秀麿の性向を外界へ向かわせようと氣遣う友人が綾小路である。綾小路はやはり「かのやうに」中で「僕はそんな怪物の事は考へずに置く。考へても言はずに置く」。「僕が画をかくやうに、怪物が土台になつてゐても好いから、構はずにずん／＼書けば好いぢやないか」。「意氣地がないねえ。」「いよ／＼意氣地がないねえ。そんな葛藤なら、僕はもう疾づくに解決してしまつてゐる」と言い放つ。論より実行を説く綾小路は、秀麿の「高等遊民」的弱点を見逃してゐない。作中の「サンチマンタル」は、綾小路から見た秀麿の内向的で感傷的な弱さを鋭くついた言葉であり、同時にそれを自覚していながら、断行できない秀麿の深い苦惱を看取することができる。

日本の電車は「皆載せられる丈客を載せたのなら好いが、載せられない丈客を載せた車であつた」とベルリンの電車と比較し、その存在目的の相違点を指摘し、批判する。日本の西洋文化の受容が本末転倒していることを暗に喩えている。この満員電車は、Carnegieがないのに急いで西洋文化を詰め込もうとしてゐる明治日本の現状そのものである。文化というものはそのように短時間で大量に作り出せるものではないことを諷刺してゐる。このやうな日本において秀麿は、ベルリン留学中のやうに「あらゆる煩累の糸を切り放されて、空中に浮かんた飛行船のやうな」「自由な」「心持には、どうしても」なれないのである。生活スタイルそのものに大きな開きがあり、しがらみも多く、思うまま生きら

れない秀麿の苦しい心境が窺われる。生活と学問、両面から秀麿を苛々させる日本の社会が、電車と客との關係を象徴的に諷刺的に描かれている。また、「洋行婦の人の中に、此心持を誇張して、故郷を詛ふのなんのと云ふもの出て来るのは、面白くない現象ではあるが」と述べ、皮相的で短絡的な洋学崇拜型の知識人には見られない苦渋の色を見ることができぬ。

#### 四

秀麿は「品川行に乗り換へた」電車の中でベルリンで逢つたところのある渡辺参事官に偶然出会う。そして、「実は僕もフィルハールモニーに往くのです」という渡辺と連れ立って演奏会場であるフィルハーモニー（音楽同好会）長の外戚I男爵家へ向う。男爵邸は「遙かに道から引つ込めて立てた」「石の柱、鉄の扉で」出来た「大きい門」構えである。渡辺参事官に「自動車と云ふ、ごつくした、あらあらしい automobile の出入するには適當で、どうもこの怪物が出来て出入するのを予知して立てたやうな門ですね」と言わしめている。典型的な西洋建築である。西洋音楽を聴くにふさわしい邸である。

道が大きい弧線を書いて右へ曲がると、老とか死とか云ふものを知らない人の住みさうな、白い石で造つた、がつしりした家の正面がある。（中略）中は広い、広い花壇である。

中央を方形にしきつて、一面に牡丹を植ゑた所と、その向う

に帯のやうに、種々の色のチュリツプを咲かせた所とが最初を目を引く。（中略）客は皆藤棚の下に集まつてゐる。客の数は随分多い。併し一ぱいに椅子を並べた藤棚の下が余り広いので、寂しく見える程である。（中略）男よりは女が多い。洋装よりは和装が多い。袷の季節の紋附に、流行の色か、青が勝つてゐるが、翻る袖の八口、腋の帯揚、手にすぼめて持つた蝙蝠の日傘、髪飾の色々に、際限のない変化がある。

男爵邸を行き来る自動車という名の「怪物」と稀に来る「さし挽の人力車」、邸の庭園に咲くチュリツプと牡丹、洋装と和装の男女、いずれも西洋と東洋の象徴として配されており、日本の西洋化の縮図である。そこには明治四〇年代の日本の状況がやはり象徴的に語られている。「女」と「和装」が多く、彼女たちの身に着けたものには「際限のない変化がある」。女性の煌びやかな色彩感覚には、日本人女性の意識の変革と社会進出をめざす方向性を暗示させている。「流行の色か、青が勝つてゐる」という表現には、女性解放運動の中心的な役割を果たしていた「青鞥」のイメージが重なり合う。それに比べ「男」の方はどうか。

「男は大抵黒のフロツクコオトで、石の家に近い、背後の方に片寄つて、暗い色の疎な列をなしてゐる。秀麿は渡辺と一しよにその暗い色の列に這入つた。渡辺は次官やら局長やらの数人に挨拶して廻つたが、秀麿は近い所にある同族の誰彼に会釈したばかりで、片隅に立ち留まつて、徐かにあたりを見廻した」とある。「暗い色の疎な列」には、葬儀の列を想像させる。大逆事件以

後の言論や政治運動の圧迫感をイメージさせる暗くて陰湿な世相が反映されている。

暗い色の列のゐる反対の側に、色彩の変化に富んだ貴夫人の群を隔て、二つの伶人団が控へてゐる。彈奏器を手にした黒服の群と、吹奏器を手にした赤い徽章の軍服の群とである。伶人団の手前にはあちこちに、葉の勝つた熱帯植物の盆栽が置いてあつて、その辺の前列の椅子は、まだ待たれてゐる貴い方々のために明けてある。(中略) 貴い方々の御前で身じろぎもせずゐる、美しい人たちの群が、譬えば色はりの紙を揃へて置ねて、文鎮で押へてあるやうに感ぜられる。文鎮の重みは、貴い方々のまだお見えにならない時から、もう紙の上に無形に加はつてゐて、群集は擅に芝生の上に散らばらずに、藤棚の下に纏まつてゐたのである。

制服を着用し、統率がとれた伶人団(楽団)、観客の最前列には「貴い方々」が並び、「貴い方々の御前で身じろぎもせずゐる、美しい人達の群」は、「色がはりの紙を揃へて置ねて、文鎮で押へてあるやうに」譬えられてゐる。「皆好くおとなしく聴いてゐますね」という秀麿に、「さうですなあ。解かりもしない人が多い癖に」と渡辺は言い放つ。この「群集」の「纏ま」りは、個々に西洋音楽に対する造詣が深く、聴き入っている種類のものではなく、「貴い人々」の重みが「無形」に加わつたがゆえに「殊勝らしく」、「相変らず殊勝らしく聴いてゐる」静けさなのである。「客の群」なのである。彼らの姿は、(裸の王様)のよ

うな滑稽さを醸し出している。それはたんに権力者に擦り寄り、迎合して行く者への皮肉や批判だけではない。無批判的な行為が、形式を内容より優先させていくことの証左でもある。文鎮である身分と権力の重みは、この芸術鑑賞の場においても十分に發揮されている。最も自由や解放を尊ぶ芸術の領域でさえ社会の厳しい現実が影を落としていることを自覚する。秀麿の関心は、眼前の光景から社会を秩序立ててゐるものについての考察に向かつた。

秀麿は社会の秩序と云ふことを考へた。自由だの解放だのと云ふものは、皆現代人が在来の秩序を破らうとする意圖の名である。そしてそれを新しい道德だと云つてゐる。併し秩序は道德を外に表現してゐるもので道德自身ではない。秩序と云ふ外形の縛には、随分古くなつて、固くなつて、改まらなくてはならなくなる所も出来る。道德自身から見れば、外形の秩序はなんでもない。さうは云ふものゝ、秩序其物の価値も少くはない。秩序があつてこそ、社会は種々の不利な破壊力に抗抵して行くことが出来る。秩序を無用の抑圧だとして、無制限の自由で人生の諧調が成り立つと思つてゐる人達は、人間の欲望の力を侮つてゐるのではあるまいか。

秩序と道德、それらの意味と価値が語られる。秀麿は *Le jour - l'heur veut que qui veut faire l'ange fait la bête* の言葉を例に挙げ、社会「秩序を無用の抑圧だとして、無制限の自由で人生の諧調が成り立つと思つてゐる人達」を「余り樂觀に過ぎるのではあるまいか」と嗜めてゐる。こうした批判はこれま

で囑外の社会秩序の維持と必要性を説く論理が強調されてきた。だが、囑外が山田珠樹宛の書簡で述べた「白樺連ノ一人ニ此ノ如キ髪ノアルヲフト思イ出シ書キ候」とあることから、この「人達」とは明治四三（一九一〇）年四月に創刊された雑誌「白樺」に集まつた理想主義者たちであり、この文は彼らへ向けられた *message* であると判断される。「さう云ふ人達は秩序を破つて、新しい道徳を得ようとしてゐるが、義務と克己となしに、道徳が成り立つたらうか」と疑問を投げかけている。ひとたび社会の規範と秩序が破られ、その重みを無くしてしまつたら、思いのほか人間社会というものは脆くその調和を失うのではないだろうか。「人は天使でも獣でもない」と結び、一人一人の自由な個性の発揮と教養の成果が、人類の幸福と平和な社会を齎らすという樂觀論に懐疑的である。

此藤棚は尋常の藤棚ではない。（中略）尋常の藤棚でも、大いに人工の加はつたものであるのに、それに一層人工を加へて殆ど劇場の弔枝と云ふ物を見るやうに、全然自然を離れた花が造つてある。（中略）只官能の受用を得る丈が人生の極致であらうか。さう云ふ人達は動もすれば自然に還れと云つてゐるが、その蓄へてゐて縦たうとしてゐる官能的欲望が、果して自然であらうか。その自然は此藤棚のやうになつた自然ではあるまいか

五月の爽やかな風になびく藤棚、その背後に秀麿は「大いに人工の加はつた」「殆ど劇場の弔枝と云ふ物を見るやうに」意図的

に組み込まれた（自然）の姿を見る。そこに秩序と道徳が保たれてこそはじめて（自由）の意識や問題も存在するものなのだという思いが匿されている。秀麿の（創の痛）は、それらの内実こそ存在するのである。「無制限の自由で人生の諧調が成り立つと思つてゐる人達」に秀麿の（創の痛）は理解されない。

この作品は、その内実の問題をそれぞれ父子の会話から導き出すことによつて、そこに横たわる親子関係や世代間の溝を浮き彫りにしていた。父子間で交わされ、露呈された秀麿の憂いは、それぞれ男爵家の庭園で開かれた音楽会で、皆「藤棚の下に纏まつて」傾聴する「客の群れ」、その姿に象徴的に捉えられていたのである。それは音楽会に集まつた聴衆を「徐かに」「見廻」す沈着冷静な傍観者秀麿の観察眼が生かされている場面でもあつた。この時秀麿は群集から距離を置き客観的な視点を獲得している。音楽会を鳥瞰する立場の秀麿がそこに在る。が、同時にそれは現実には足を踏み入れることができない秀麿の「意気地」のなさ、「八方塞がり」の状態と表裏をなしている。

渡辺が「五条さん大麦四升と云ふ話を」ご承知ですか」と云つた。「なんです。それは。」「大麦四升小豆三升と唱へて成仏したと云ふのです。応無所住而其心生と唱へると云はれたのが、さう聞えたのです。」「なるほど。成仏にも概念はいらなうのでせうね。」

末尾で渡部参事官が持ち出すこの「大麦四升と云ふ話」と直後の秀麿の言葉はその点で意義深い。「なるほど。成仏にも概念は

いらないのでせうね」という台詞に五条秀麿の弱さが集約され、批判撰取されているからである。「藤棚」は五条家の「家庭内ノ葛藤」を描き、「一層深ク云ハバ小生ノ一長者ニ対スル心理状態ガ根調トナ」って出来ている。I男爵家の庭園で催された音楽会を舞台にして織りなされる財力・権力共に兼ね備えた上流階層の人々の思惑や俗物性を藤棚の中で葛と藤が纏れあい絡み合っている様に準え、かつ秀麿の葛藤にも喩え、その「心理状態」を「根調」として書かれた作品なのである。

#### 注

(1) 明治四五(一九一〇)年五月二十五日の日記に「味爽藤棚脱稿す」とある。

(2) この書簡は、大正七(一九一八)年二月一八日付のもので、「十七日夜 森林太郎 山田珠樹様」と記されている。

(3) 明治四五(一九一〇)年五月五日の日記にも「妻、茉莉と高輪岩 崎邸のPhilharmonic会にゆく」とある。

(4) 食事の場面で家庭の問題が象徴的に描かれるのは、この作品に限らず「半日」「蛇」等にもみられる。

(5) 山田珠樹宛書簡(前掲)

(たきもと・かずなり 本学助教授)